

仏教音楽：生命(いのち)の流れとそのひびき

著者	渡邊 顯信
雑誌名	真実心
号	16
ページ	1-40
発行年	1995-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000564/

仏教音楽

—— 生命いのちの流れとそのひびき ——

渡邊顯信

- I ▲ はじめに ▼
- II ▲▲ 仏教音楽：その流れ ▼
- III ▲▲ 仏教音楽：そのひびき ▼
- IV ▲▲ むすび：その目的 ▼

仏教音楽
ただいま学長先生からご紹介いただきました渡邊でございます。実は、昨年に続きまして二度目ということでございます。私、昨年はこの宗教講座についての内容を十分に理解せざうか

がっておりまして大変失礼いたしました。今年度も「仏教音楽」という講題を掲げさせていた
だきました。昨年と大きな変化がございませんので、ある面では去年お聞きの方には同じこ
とかと思われるかもしれませんが、その節は、復習のつもりでお聞きいただければありがたい
と思います。

私自身、元来、音楽のほうでも落ちこぼれてございました。また、音楽に関しましては、正
直なところ、けっして専門家ではありません。またそういうことを十分に学んだ者でもござい
ません。しかし、そういう者ではありますが仏教音楽に救われたという事実だけはたしかでござ
います。救われたという言葉をお聞きになって、あるいは何人かの方はいぶかしく思われる
かもしれませんが、まさしく命を救われたという思いがございます。それでタイトルも「仏教
音楽―生命いのちの流れとそのひびき―」ということにさせていただきました。

私は大谷大学の出身で、学生時代は男声合唱団に所属しておりました。実は光華学園の学園
長阿部先生も、大学の事務局長をなさっておられる四辻先生も、お二人とも私達の合唱仲間
でいらっしやいました。そのような方々に支えられて落ちこぼれであった私が仏教音楽というも
のに接する機会をいただき、それに救われたということでございます。そのことなどを含めて、

これからお話してみたいと思います。

その前に、平成二年に光華女子学園が創立五十周年をお迎えになりましたね。そのときに、私自身ご縁があって二度ほど行事に参加させていただきました。一つは、図書館で開催された創立五十周年記念展観『大蔵経展』でした。各種の仏教経典を一堂に集めた素晴らしい展観でございました。そのとき図書館の主任であられた熊崎先生とお話していますうちに、その方も合唱活動に造詣の深い方だということがわかり、あらためて図書館と合唱の両面で、ご縁があったのですねと語り合ったことでした。

もう一つは、記念事業の一つとして真宗文化研究所が創設されました。その開所式のとときに、当時の学長であられた蜂屋先生のご挨拶が非常に印象的でした。その内容は、本学に創設された真宗文化研究所のネーミングの由来として真宗文化についてお話がありましたあとに、ミレーの「落ち穂拾い」の絵を題材にされまして、このようにおっしゃいました。「ミレーの落ち穂拾いのように、私たちの研究所の役割は、生き生きと脈打っている真宗文化の落ち穂を拾うようなささやかな仕事である」と。非常に内面的と申しましょるか、奥深いと申しましょるか、そういう内容の開所式のご挨拶でした。そのときはさほど感じなかったのですが、昨年、

本年とこの宗教講座にお伺いするうちに感じましたのは、私自身がささやかな小さな落ち穂の一つだったのだな、ということです。その落ち穂は朽ち果ててしまいそうな不十分な実態ですが、光華学園と研究所の願いに拾っていただいたという感じがいたします。

そのへんのところをあらためて感じますと、今この場に立っていること自体を非常に光栄に存じますと同時に緊張もいたしております。ある面では、恐れに近いものを感じております。つまり、この宗教講座で、皆様が期待されておられるものを十分に私自身がお話し申しあげ得るかどうかが危惧されます。しかし、ここにこういう形で立たされている以上は、精一杯申しあげて、皆様の今後の生活の中でながしかの肥やしにでもしていただければと願っております。求められた講題を「仏教音楽」という形でお届けいたしました。さっそく本題に入りますが、皆様のお手数を少なくと思ひましてレジュメを用意いたしました。

それではI△はじめに▽の「仏教音楽」についてですが、初めに「宗教と Religion」について申しあげてみたいと思います。

皆さんは普通は、「宗教=Religion」だと思われますね。ところが実際には、歴史的にみましても、宗教という言葉は非常に古い言葉で中国の南北朝時代の頃から使われておるようです。

それが明治になって「Religion」という言葉に対する訳語として、十分な検討を加えられないまま当てはめられてしまいました。これは重大な問題ですので、この「宗教」という言葉の語義について調べてみました。レジュメに書きましたとおり、「宗」という字は、教により、表示される要点のこと、「教」という字は、宗をつぶさに説き表す文字や言説をなぐ做い学ぶことという意味が記されてあります。

一方、「Religion」という単語を英語の辞書でもう一度見直しますと、「①再び拾う、集める、②再び結ぶ」などと書いてあります。とくにキリスト教の神学者の中では、②の意味で使われていたようです。ちなみに、ラテン語の「religare」という言葉が「再び結ぶ」という意味で、神と人類を結ぶということです。しかし、これはキリスト教等の「啓示の宗教」すなわち、「神の恩恵により示されたものに基づく宗教」の中では当然のことなのですが、仏教は「目覚めの宗教」すなわち、「人間の理性に基づく宗教」です。そういう宗教ですので「Religion」ではないわけです。

教 明治以降、「宗教≡Religion」とされたこと自身が大きなマイナスになりまして、宗教音楽
仏 やその他もろもろのことも言葉の意味が狭まってしまいました。ある面では日本人の舶来主義

趣向のため、とくに明治時代においては、先進諸国の文化に対するあこがれが非常に強かったわけで、そのために本来もっていた日本の文化といったものを軽んじてしまっています。その社会的風潮が「Religion」という言葉をいとも単純に「宗教」と翻訳してしまった大きな理由の一つであろうかと思えます。

そこで、レジュメの最初の1「釈尊と音楽」ということになります。釈尊に關しましては、光華女子学園の『聖典』に詳しく書いてありますので、どうぞそれをご覧ください。

ところで、釈尊の布教活動そのものはパーリ語でなされたと云われています。パーリ語という言葉を初めてお聞きの方もおられるでしょうが、皆様は無意識にパーリ語を一つ使っておられるのです。それがここに書きました「般若」という言葉です。「般若」と漢字で書いてありますが、パーリ語のローマナイズが「paṇā」でその音写が「般若」、その意味は「智慧」ということです。サンスクリットでは、「プラジュニャーPrajā」と申します。「pra-」は向かってとか、それ以上にといい接頭辞で、「ジュニャーjñā」は知るといふ動詞です。もう一つ、「ヴィジュニャーvijñā」という言葉がございます。これは分析してものを知るといふ意味で「知識」と漢訳され、この「知識」からさとりを開く最高の「智慧」に深まることが仏教の根

幹でもあり、その基本的姿勢を示す言葉が「ブラジュニャー智慧」であります。

ところで釈尊の時代には文字がありませんでした。すべて口述です。皆さんも耳からものを聞こうと思うときには、自分なりに言葉の要点をまとめますね。あるいは、少しメモロティ化しますと記憶しやすくなりますね。日本の古代も同じようでした。『古事記』は稗田阿礼が口述して、太安麻呂が筆記したものとされています。このように、文字がない時代には耳で聴くしかなく、耳で聴くということは、真剣にならないければ聴こえませんし、身につけません。そこに知識から智慧に転換されることが必要となる要素の一つがあるのでしよう。

次に、2「経典記述事例」を示してみましよう。音楽のことについて経典ではどう書いてあるかということです。パーリ語の原典に「長部経典ディーガニカーヤ (Dīgha-nikāya)」という長い経典を集めた部分がありますが、その一つ『帝釈所問経 (Sakka-pañha-suttanta)』では次のように書いてあります。

音　　パンチャシカよ。いま汝の〔弾いたベルヴァ製の黄色いヴィーナの〕絃の音は、歌の
教　　音色と調和し、歌声は絃の音色と調和していた。しかもパンチャシカよ、その絃の音色は、
仏　　歌の音色に勝らず、歌声は、絃の音色に勝ったものではなかった。

パンチャシカが弾き歌った曲は、どちらかが優れていたのではなく、調和していたということです。調和することとは、まさしくハーモニーそのものです。一方が強く出ますと調和は崩れます。そういう意味で、この経典での記述は非常に大事なことであります。釈尊ご自身は、涅槃とか修行の中でそれを阻害するようなものに関して、厳しく戒められております。しかし、それを助けるものにつきましてはこのように讃えておられます。その一つの実例が今申しあげた経典です。

いずれにしても、私達は単に音楽といいますと、趣味とか技術に直結して思い込んでしまいますが、そうではないのです。本当の音楽というのは心の問題です。交流の問題です。そこで、経典を含めまして釈尊のそして仏教の基本姿勢を示したものを次に出しました。レジュメには、「釈尊没後の結集（編纂会議）」としてありますが、「結集」は結集（けっしゅう）と字は同じですが、意味は全然違います。ここに書きましたとおりサンスクリットでは、「サンギイ・ティ sangiti」と申します。「san-」は集まるという意味の接頭辞です。「ga-」歌う、奏する（「」という動詞と合して「ともに歌う」、「合奏する」となります。楽器がある場合には楽器と合わせて歌うという意味です。この言葉が仏典の編纂会議を表現する言葉になりました。

つまり、いろいろな方々が記憶していたものを確認し合うための会議が編纂会議で、それを「結集」と表現しました。会議そのものがすでに合奏なのです。相手の意見を聞こうとするのと、これも大きな音楽の世界です。相手の意見というのは相手の音です。このことがすでに編纂会議の中に取り入れてあります。もちろん積尊はそれを音楽とはおっしゃってはおられませんが。しかし姿勢はまさしく音楽の世界ではないでしょうか。

さて、今日の講題の性格上、どうしても、皆様に御理解していただいた方がよいと思われる基本的な仏教用語が若干ありますので、それを初めに確認しておきたいと思えます。まず「縁起」という言葉についてです。「縁起が悪い」とか「因縁があって」ということをいいますが、この場合の「縁起」は正しい使い方をしなければなりません。「縁起」とは、文字通り、「すべての事象はいろいろな要素が集まって生じているもの」という意味です。例えば皆さんが座っていらっしゃる椅子もそうです。着ておられる服もそうです。昔は、蚕を飼って糸を紡いで編んでいたわけです。今も文化として残っていますけれども、現在のように高度に技術化・機械化された時代では、皆さんも機織りをなさったことはないと思います。しかし、昔は糸を紡ぎ、機を織って衣類をつくっていました。そのように作業工程も含めてすべてのものの存在

は、いろいろな要素が集まり、その縁によって生じているのだということです。これが「縁起」です。

二つ目に、「無常」という言葉がございます。この言葉の意味を、皆さんはもしかして消極的にしか考えておられませんか。あわれさとか、非常にも悲しいとか。しかし、決してそれだけではないのです。ここに書きましたとおり、すべての事象は、常なるものではないのだということ。つまり、すべての事象は、人間の期待や意志に関係なく移ろい変化するものです。それが「無常」という意味です。当然、育つということ、生きるということ自身が「無常」です。子どもが生まれ、元気に育っていく喜び。これも「無常」です。しかし、病気になるに衰えていく。これも「無常」です。自分の感情による善し悪しではなく、事実として変化していくもの、それが「無常」です。ぜひ「無常」の本質だけはしっかりと見据えていただきたいと思います。決して侘^{わび}しさとか、はかなさだけではありません。その反対の積極性、プラスの面も「無常」なのです。

三つ目に「苦しみ」を掲げました。物理的にも生理的にも心理的にも精神的にも悪い状態という意味です。皆さんもご経験になっていきますね。きっと今後の人生にはもっと厳しい経験を

なさることもあるかと思えます。ここに「一切皆苦」、「一切行苦」という言葉が出てきます。一切のものはすべて苦である。それをパーリ語で「dukkhā sarva-samskārah」。[sarva] というのは一切という意味で、「dukkhā」が苦です。「samskārah」というのはつくられたもの、という意味ですから、一切のつくられたものは苦であるということです。これもたしかに私たち自身が常を感じていることですね。

これに関連して、三法印とか四法印という言葉があります。例えば諸行無常とか涅槃寂靜という言葉があります。皆さんは、「いろはにはほへとちりぬるを……」といういろは歌をお聞きになったことがおありでしょう。この歌には三法印、四法印の内容が歌い込められています。漢字混じりで書いてみますとよくわかります。「色は匂へと散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ」色香の勝れた花でも散ってしまうのに、この世を誰が常だと云いきれるだろうか。「有為の奥山今日越えて」、「うる」というのは「有為」、つくられたものという意味です。その事実を知って「浅き夢見じ酔ひもせず」。「あさき」は浅い、「ゑひ」は酔うという意味です。浮かれてばかりいてはだめだよということですが、それが最後の涅槃寂靜ということになります。いろは歌自身が仏教の基本的な内容を歌いあげているのです。

仏 教 音 楽

四番目に「無知」ですが、これは「avidya」の翻訳です。「a」というのは否定の接頭辞です。「vid（知る）」という動詞に「ya」という分詞がつきまして「avidya」となります。パーリ語では「avijā」といいますが、「無明^{むみやう}」つまり「無知」ということです。迷い、苦しみの原因というのは実は無明だったということです。誤解というのは相手を知らない場合に出ます。相手を知れば誤解が解けていきます。解けたときは無明ではありません。「明^{みやう}」の世界です。さて最後の言葉は「真実」です。古い訳では「諦」という漢訳もあります。この「諦」はギブアップの「あきらめ」ではなく、「明らかに見極める」ということです。それが「諦める^{あきらめる}」という本来の意味です。すなわち、「真実」とは、「あるがままの事実を明らかに見極める」ということになるのです。

以上、仏教用語の説明に時間を費やしましたが結論としましては、仏様とは、目覚めた方、あるいは真実を知られた方という意味です。「Buddha」の英訳に「awakened」という訳語がありますが、まさしく目覚めた方です。目覚めた方の教えが仏教であり、音楽はその目覚めた方の本当の響きを楽しむことです。実は、「楽しむ」という言葉の中には「願う」という意味があります。ですから、目覚めた方の精神の発露である真実の響きを楽しむ、学び、願う世界、

それが仏教音楽の世界であると私は体で教えられました。

次に、Ⅱの△仏教音楽：その流れ▽について述べたいと思います。仏教音楽は、インド、中国、朝鮮、日本という形で伝わってまいります。インドの時代は、紀元前十三世紀末頃にアーリアン人がインドに入り定住して行く中で『リグ・ヴェーダ』などが聖典として編集され、それらを朗詠することが当時の音楽でした。釈尊もそういう宗教的環境の中で育っておられます。そして、紀元前三世紀前半頃のアショカ王から、特に紀元後二世紀頃のクシャーナ王朝のカニシユカ王時代には仏教の最盛期を迎えます。とりわけ、大乘仏教の興隆期にはヘレニズム文化の影響も受けていたようであります。しかし、九世紀頃以降は、ヒンドゥー教に押され、あるいはイスラム教に押され、衰退して行きました。二十世紀前半、アンベドカールによるネオブツディズムが提唱されましたけれども、ほんのわずかです。

音楽 　ただ、厳然たる歴史的事実が例として出しました仏教遺跡のサーンチー、ガンダーラ、アジャンター、エローラなど高校時代の教科書で学ばれたことだと思えますが、そういう遺跡の中に仏教 残っております。その中のほとんどが音声菩薩（おんじょうぼさつ）、あるいはサラスパティー

です。このサラスパティイーが日本に入ってきましたと、皆さんの知っておられる吉祥天、弁財天という女性の神様になります。遺跡以外には、サンスクリットの戯曲『ジャクンタラー』や叙事詩『マハー・バーラタ』、『ラーマーヤナ』の中にも楽器とともに出てまいります。

スリランカの場合は、タイも含めますが、インド音楽がそのままの形、あるいは少し変化した形で残っています。その例を二つ出しました。一つが『三帰依文』です。先ほど学長先生は日本語訳を唱和されました。その原語がパーリ語です。

Buddham saraṇaṃ gacchāmi ブツタン サラナン ガッチャーミ みずから仏に帰依したてまつる

Dhammaṃ saraṇaṃ gacchāmi タンマン サラナン ガッチャーミ みずから法に帰依したてまつる

Saṅghaṃ saraṇaṃ gacchāmi サンガン サラナン ガッチャーミ みずから僧に帰依したてまつる

Buddham' Dhammam' Saṅgham だけが違って、あとは同じです。「saraṇaṃ」というのは拠り所、安心する場所、帰依する場所という意味です。「gam (行く)」という動詞の一人称単数現在形が、「gacchāmi (私は行きます)」です。「gacchāti」となりますと三人称です。ですから、「gacchāmi」というのは「他人が」ではなく、「私が」という主体的表現です。『三帰依文』を唱えるということは「私は三宝を拠り所とする」という積極的な決意表

明をすることです。

二つ目の『Dhammapada』は『法句経』と訳され、釈尊の教法からいろいろな言葉を集めたものです。この中に、「まことこの世では、怨みによっては怨みは決して鎮まることはない。怨みを離れてこそ消える、これが永遠の真実である」という言葉があります。これは仏教の言葉というだけではなく真実ですね。昭和二十六年（一九五一年）九月に開催された第二次世界大戦後の対日講和会議のときに、当時のスリランカの代表での中に大統領になられたジャイエワルデネ氏が、賠償請求権の放棄演説の中で『Dhammapada』のこの言葉を引用されました。「釈尊がこうおっしゃっている、『怨みより離れてこそ怨みは消える』と。その教説によって、私どもは日本から賠償を取る権利を放棄します、日本の大変な状況をわれわれの放棄によって救っていききたい」と演説して下さいました。これは非常に有難い大事なことでした。

スリランカを経て、東南アジアでは八〜九世紀頃ポロブドゥールが、そして十二世紀頃にはアンコールワットが創建されレリーフ等の中に散見されています。いつか旅行なさる機会があれば、ぜひお訪ねになってみてはどうかと思います。

仏教音楽
チベットのほうでは、地理上の問題もあり、インドや東南アジアと違いました独特の音楽が

残っております。これも機会があればお聞かせしたいと思いますが、非常に単純ですが不要なものがないエッセンスだけの作品がかなりあります。例えば、各家庭で祭壇をもって、テレビ等でご覧になったことがあると思いますが、マニ円筒をクルクル回しながら「オン・マニ・パドメー・フォーム (Om mani padme hūm)」という六つの真言を唱えます。「mani」というのは宝珠・珠玉という意味です。「padma」というのは蓮華です。

中央アジアでは、三世紀頃にガンダーラを経由して伝承され、特にクチャにある千仏堂の壁画が非常に著名です。ジャータカ(本生物語)とか諸菩薩の奏楽が絵に描いてあります。これは美術全集などでご覧いただくと思います。

そして、われわれにとっていちばん身近な国が次の中国・朝鮮そして韓国ですが、中国には前漢の一世紀頃に伝わっています。当時は儒教や道教がありますから、それと並んで、あるいはそれを越えて広がっています。いずれにしても、南北朝、隋、唐の時代のなかで、密教文化と一緒に最盛期を仏教音楽が形づくっていきます。隋、唐になりますと、クチャ・サマルカンド・トルファン等の西城音楽が流行して、当時としては世界でいちばん進んだ音楽国家であったといっても過言ではないと云われています。たまたま今、私の先輩が中国に行っておられま

して、本来、西洋音楽が中心の方なのですが、自分がつきつめていって勉強しなければならなかったのが中国だといわれました。もちろん古代の音楽です。いずれにしても日本に与えた影響は非常に大きなものがあります。

次に、「声明」について触れておきたいと思います。この言葉は「五明 (pañca-vidyā-sthāna)」の二つに分類されます。「pañca」は「五つ」、「vidyā」は「知」とか「明」とも訳され「明らかな」、「sthāna」というのは状態ということです。例えば国名のアフガニスタンとか、パキスタンの「スタン」と同じことで、「sthāna」は国とか場所という意味でもあります。この「五明 (五種類の学問体系 pañca-vidyā-sthāna)」の中の最初にある声明 (śabda-vidyā) が、言語学とか文字あるいは音韻に関する学問です。学問として基本的なものですからその第一にあげられているわけです。その別名が梵唄 (bhāṣā) で、これには注釈という意味もあります。それから、「唄匿」は「pāṭhaka」という言葉の音写ですが、暗唱する人あるいは朗読する人、専門家とでも申しましょか。このような言葉が声明の別名としてあげられますが、いずれにしても經典の朗読などにも、声明の音楽性は重要な要素であります。ただ喉を詰めて唱えるのと、心から唱えるのでは、字は同じでもひびきが違ふと思います。そ

ういう意味で音楽性ということが大事になってきます。経典の中から韻文が朗詠され、それが声明に発展していきます。日本における最初の声明は、天平年間に来日したインド人のバラモン僧によって伝えられたという記録があります。それが平安時代から現代へと伝わり発展して参りました。

ところでこのような仏教音楽の記譜法を「博士」といいます。普通は「博士」という字を見ますと、学位をもった方や物知りと理解されますが、声明の中では記号のことです。それには「古博士」、「五音博士」、「目安博士」の三種類がありますが、五音博士につきましては、学長先生のレジュメに書いてくださっております。宮・商・角・徴・羽という五つの音の名前があり、西洋音楽のドレミソラ等の五つの音に当てはめられます。「目安博士」というのは、「古博士」と「五音博士」をミックスさせたものです。

こうした声明は、今日までにいかに伝えられてきたでしょうか。次に、その近現代の歩みについてみていきたいと思います。仏教音楽という言葉自体がまだ定着しておりませんが、仏教唱歌、讃仏歌、讃歌、聖歌、鑽仰歌等といういろいろ名付けられています。歌を伴う場合だけでなく、器楽だけの場合ももちろんあります。

当然のことですが、日本では明治時代になって初めて西洋音楽のスケールをもった作品が発表されました。それまでは替歌が主でした。「法の御山」という曲をお聞きになったことがあると思います。原曲は雅楽の「越天楽」です。作詩は土岐善静と書いてありますが、この方は国文学者の土岐善麿先生のお父さんでいらっしやいます。このように明治時代は仏教音楽の草創期でありました。大正時代に入りますと一気に発展いたしました。仏教音楽の成長期となり、「真宗宗歌」が大正十二年に立教開宗の記念でつくられています。「報恩講の歌」とか、「み仏に抱かれて」とか、「恩徳讃」、そういった作品が発表されております。作曲家としては、山田耕筰先生とか澤先生などがいろいろな作品を書いてくださっています。

昭和になりますと、その初めから十年代にかけましては非常に大変な時代をむかえます。第二次世界大戦を迎えた頃です。日本の国民が思想的にも自由に行動できなくなった不幸な時代です。そのような世相とは相反するのですが、その時代に仏教音楽が非常にたくさんつくられております。一九二八年には文部省の中に仏教音楽協会が設立されています。その理事や評議員の中には幸田露伴、北原白秋、野口雨情といった方々が入っていますし、作曲家の中には山田耕筰、小松耕輔、弘田龍太郎、「赤い靴」を作曲した本居長世、藤井清水といった方々がお

られました。それ以外にも仏教界や学界・財界の方々を擁して会ができています。そして昭和四年四月三日に仏教音楽応募創作曲の発表会を開催しています。その作品がここにあります「仏教聖歌第一回発表、懸賞当選歌ならびに歌」で、『花祭の歌』『朝の歌』の二曲であります。第二回目は仏教聖歌という形で十一編載っています。この形式が昭和十五年まで続き、合計十一回百七十三曲が発表されました。これは驚くべきことです。世の中が軍国主義に傾いてゆく、そういう中でこれがつくられています。もしかすると不幸な世相を救いたいという願いが強かったからでしょうか。しかし、十五年以降は世界大戦が激化しましたので、残念ながらストップしております。

そして、昭和二十年八月十五日、終戦を迎えますと、しばらくして種々な組織がつくられていきます。勿論、仏教系の大学、光華女子短期大学、龍谷大学、京都女子大学、大谷大学などの合唱団の先輩たちもさっそく合唱活動を再開されています。初期の活動の流れの中で、昭和二十二年になりますと、三月十八日、大谷楽苑が設立されました。主宰者は、光華の総裁であられた大谷智子お裏方御夫妻です。このご夫妻のつくられた大谷楽苑が、昭和二十三年六月五日に、公募に合格した鑽仰歌十曲を発表演奏しています。その第一曲目が「みほとけは」です。

その五年余あとの昭和二十八年に、京都学生仏教音楽研究会が発足しています。会則の中に「合唱音楽を中心に会員相互の宗教的情操を養い、仏教音楽の研究並びに普及発展を期す」とあります。そのメンバーは皆さんと同じ年代の学生でした。私たちもそうでした。

昭和三十五年頃になりますと、大谷派合唱連盟が親鸞聖人の七百回忌の記念に発足しています。西本願寺では仏教音楽研究所が同じような形で発足しています。その頃の作品の抄録を、資料に掲げておきました。最初の昭和二十四年の蓮如上人四百五十回忌法要のときに土岐善麿詩、清水脩曲「交声曲 蓮如」ができています。少し先になりますが、平成十年の蓮如上人五百回忌のときに、記念として演奏されるかもしれません。昭和三十六年の親鸞聖人七百回忌には、土岐善麿詩、清水脩曲「交声曲 歎異抄」が発表されました。唯一の東西両本願寺合同主催イヴェントで、京都学生仏教音楽研究会と私たちOB四・五名も参加した初演演奏でした。その他、細かいものがたくさんありますが、このなかで目を留めていただきたいのは、昭和三十三年に黛俊郎さんが「交響曲 涅槃」を発表しておられることです。するどいことをおっしゃる方ですが、「涅槃」そのものをテーマにした作品です。昭和四十一年には大中恩さんも「交声曲 涅槃」を書いておられます。「サッチャンはね、サチコというんだ、ほんとはね」とか

「バナナの歌」などを書かれた方です。そして、昭和六十一年には菊村紀彦作詩作曲「歌劇親鸞」という作品も発表されています。昭和六十三年には、高史明作詩、木村雅信作曲「戦争にいのち奪われたあなた方よ」という曲名で、日本人だけでなく、韓国、北朝鮮、中国、東南アジア、すべての戦没者に対する追悼の歌が東本願寺の委嘱作品として発表されています。素晴らしい作品です。以上、大雑把ですがⅡ△△仏教音楽：その流れ▽をたどってみました。

ではこれから、Ⅲ△△仏教音楽：そのひびき▽に入りたいと思います。今申しあげたようなことをお含みおかれまして、テープ演奏ではありませんが、実際に仏教音楽をお聴きいただきたいと思えます。最初は東京の下町の子どもたちがポニージャックスと一緒に歌った「仏さま」です。子どもたちのあとで出ますのがポニージャックスです。

仏さま

山田

静 作詩

小松

耕輔

作曲

一、のんのののさまほとけさま

わたしのすきなかあさまの

仏教音楽

おねむのように やんわりと
だかれてみたい ほとけさま

二、のんのののさま ほとけさま

わたしのすきな とうさまの

おててのように しっかりと

すがってみたい ほとけさま

三、のんのののさま ほとけさま

みあかしあげて おがむとき

おすがたみえて きらきらと

ごこうのひかる ほとけさま

二曲目は「ふれあるき」という歌で、報恩講の様子を歌っています。

ふれあるき

観月 浩道 作詩

中田 喜直 作曲

一、次郎じろろうやんとこの報恩講ほうおんこうに

ハアよ おまいり まいり

太郎たろうもこいや

三太さんたもこいちゅうたら

おまいり まいりのふれあるき

母屋おむやのじいちゃ 分家ぶんけの嫁よめご

みいんな みんな

おまいり まいり

ご院家ごいんけさん みえたよ

提灯ちようちんついたよ

ハアよ おまいり まいり

二、年に一度ねんいちどの報恩講ほうおんこうに

ハアよ おまいり まいり

花はなやもこいや

雪子もこいちゆうたら

おまいり まいりの ふれあるき

甘酒あまざけできたよケンチャン炊たけたよ

みいんな みんな

おまいり まいり

お正信偈しょうしんげ となえて

お説教せつぎょうちようらん 聴聞

ハアよ おまいり まいり

次は「お寺の石段」という曲で、私も学生時代に、学仏音で光華の先輩の方々と混声合唱で歌ったことがあります。本来は混声になっています。皆さんも、お寺の石段で遊んだことがあ
るでしょうね。じゃんけんしたりして、その情景です。

仏 教 音 楽

お寺の石段

吉江 久弥 作詩

中田 喜直 作曲

一、のんのんののさま

つよい子よい子は 石の段

ひとりで上まで のぼれます (ほら)

お寺の石段 ドレミファン

父さん ほらほら桃の花

二、のんのんののさま

あなたのお国はどこかしら

夕やけ雲が きれいだな (ほら)

お寺の石段 ドレミファン

母さん あの子もながめてる

実は、仏教音楽協会で出しています作品には、ある時期、踊りを伴った作品がずいぶんつくられています。次の曲は、ある意味では、戦争に傾いている国民の気持ちを踊りでまとめたという願いがあったのかもしれませんが。次の作品も踊りを伴いました。「わらんべ音頭」です。

仏 教 音 楽

一、 わらんべ音頭 工 清定 作詩 渥美 芳映 作曲 清水 脩 編曲

一、 星がまたたくお寺の庭に
お盆おどりの輪がまるい
おどるみんなの心もまるい
まるいお顔のほとけさま
シャンシャン ヨーイトナ
シャンシャン シャンときて

二、 みなおどれ
虫もうたうよ 銀杏のかげに
笛やたいこの音がはずむ
おどるみんなの心もはずむ
はずむ音頭に 天の川

三、 光る稲妻 お寺の屋根に
―くり返し―

お盆おどりの手が揃う

おどるみんなの心も揃う

揃う稲穂に稲びかり

—くり返し—

四、風がささやく柳の枝に

かざすうちわの手がやさし

おどるみんなの心もやさし

やさしおめめのほとけさま

—くり返し—

今流れておりますのは、大谷楽苑選抜讃仰歌の第七番「ほとけさまは」という作品です。これは本来は混声合唱曲です。

ほとけさまは

森山 美苗 作詩

弘田龍太郎 作曲

仏 教 音 楽

一、 ほとけさまは どこに どこに いらっしやる

春は 花咲く 枝のもと ララ

夏は 水辺の 草のかけ ララ

秋は 空ゆく 雲の上 ララ

冬は 窓うつ 雪の中 ララララ

いつも どこかで 見えて くださる

いつも 何かを おしえて くださる

ほとけさまは

あれあれ あそこに いらっしやる

二、 ほとけさまは どこに どこに いらっしやる

お眉 ま白な おじいさま ララ

お目々 やさしい おばあさま ララ

お胸 豊かな お父さま ララ

お手々 清らかな お母さま ララララ

昼でも夜でも守ってください
いつもあなたを支えてください
ほとけさまは
あなたのおそばにいらっしゃる

次からは一般の曲になります。これは「朝の歌」です。昭和四年四月の発表です。

朝の歌

杉崎

大愚

作詩

末広

恭雄

作曲

- 一、朝な朝なにみ教えあおぎ
浄き勤めにいそしむ我ら
- 二、朝な朝なにみあとを慕い
浄き思を語ろう我ら
- 三、朝な朝なにみ証たたえ
浄き意をやしなう我ら

仏 教 音 楽

四、慈恩あふるゝ 貴き一日
今日も捧げん 我らの生命

今度は「夕べの歌」になります。

夕の歌

渡邊

千秋

作詩

藤井

制心

作曲

一、静かにくれゆくこの夕

鐘が鳴る 鐘が鳴る

二、世のなやみをつつみて

鐘が鳴る 鐘が鳴る

三、聞けよ 目覚よ 同朋よ

鐘が鳴る 鐘が鳴る

四、今日の感謝と幸福の

鐘が鳴る 鐘が鳴る

これは「いのち」です。

いのち

藪田 義雄 作詩

下総 皖一 作曲

一、野の花の 小さいのちにも

仏はやどる 朝影あさかげとともに来て

つゝましい 営みいとなを与える 同じように

二、野の鳥の 幼いのちにも

仏はやどる 涼風すずかぜとともに来て

生きる身みの 喜びをささやく 同じように

三、白露しろつゆの はかないのちにも

仏はやどる 月魂つきしろとともに来て

ひと夜よさの 安やすらぎを教おしえる 同じように

次の曲は合唱とソロによる芸術性の高い作品の一つです。雪の降る山道を親鸞が歩いておられる情景を表現しています。

雪の山路

北原 白秋 作詩

橋本 国彦 作曲

親鸞聖人ならねども

雪の降る山路を

しみじみと越え申す

雪はこんこん山路を

実際には、このあとにボニージャックス演奏の男声三部合唱曲「鐘」や、「聖親鸞」という素嗜らしい歌、大谷楽苑の混声合唱「みめぐみの」や「日々の思い(平和の歌)」等皆さんがお聞きになれば歌いたくなるような作品も準備しておりましたが時間の関係で省略いたします。その他に、男声合唱曲の「礼讚無量寿」。「正信偈」の冒頭の二句「帰命無量寿如来、南無不

可思議光」に曲をつけたものです。ともに「南無阿弥陀仏」の漢訳と音訳の両方を清水脩先生

が男声四部合唱に作曲されたものです。これも大切な名作の一つで、大谷大学男声合唱団のために書いていただいたもので、初演を昭和二十五年にしております。

以上のように、もう少しお聴かせしたい作品がありますけれども、時間が迫ってきましたのでここで最後のIV \blacktriangle むすび \blacktriangledown を述べたいと思います。それは、「仏教音楽の目的」というのは何だろうかということですが。結論から申しますと、本当の生命いのちと出会う喜びや願いを歌いあげること、つまり心から心へ伝わってほしいことを音を通して表現すること、それが仏教音楽の目的の一つだと思います。

そこでレジュメに生命いのちに関する言葉いくつかを集めてみました。その中の一つに「自分の番—いのちのバトン—」という詩があります。

父と母で二人

父と母の両親で四人

そのまた両親で八人

こうして数えていくと

十代前で千二十四人

二十代前では……？

なんと百万人を越すのです

過去無量の

命のバトンを受けついで

自分の番をいきている

それがあなたのいのちです

それが私のいのちです

(相田みつを)

楽 音 教 仏
二十代前といいますが、百四万八千五百七十六人だそうです。二十四代前になりますと、一千六百万を越えます。そういう生命が集約されて、現在皆さんの生命になって、今この場で花開いているわけです。「自分の番を生きている」わけです。そういう意味で、ご自分たちの生

命というものをぜひ大事にしたいだと思います。

このように遡ってみますと非常に悠久な世界が現われてまいります。仏教では、時間論として過去・現在・未来の三世観をたてます。時間というのは、実態ではなく変化するもの、まさしく無常です。その連続です。過去のことをサンスクリットでは「atita」といい、すでに過ぎ去った時間のことです。現在とは今まさに起っている一瞬のことです。一秒前でも一秒後でもありません。瞬時です。未来は、未だ来ていない時間のことです。一秒先きも「未来」という瞬時です。その瞬時を「一刹那」と云い、現在の時間で計算しますと1/75秒だそうです。ここから一期一会を大切にしようという考え方も出てまいります。皆さんは、今、五体満足で生活され勉強しておられますが、その生命を大切にしなければなりません。つまり、今ここにしかない皆さんの生命、ここにしかないわれわれの生命、そういったものに気づかせられることが大事なのです。それを喜べる世界、それが広がっていく世界、それを願って伝えていく世界、その手段の一つが仏教音楽であろうかと思えます。本日のそれぞれの出会いも、そういう意味では、素晴らしい一刹那であり、その連続でありましょう。

ところで、

美しき色 あれど 香のなき花のごと いのちなき 言の葉 いとさみしかり

という歌もあります。もちろん意思を伝えるには言葉が必要です。目と目でものを云うというところもありますが、遮蔽されるとわかりません。やはり言葉が大事です。しかしその言葉は飾った言葉ではなく、ごまかした言葉でもなく、本当の思いを伝える生きた言葉、いのちある言葉ということだろうと思います。

つい最近「レナードの朝」というテレビ・フィルムを観ました。そのフィルムで「人間の言葉」ということについて改めて考えさせられた場面がありましたので御紹介したいと思います。一九二〇年代に流行した病気の一つ嗜眠性脳炎に罹った患者の物語でした。つまり、脳幹の傷害による筋硬直症状で、姿勢神経の機能傷害を起し、首が傾くと傾いたままで固定してしまう病気です。十歳になる前にこの病気にかかった患者が、三十年間失語症の不具者扱いをされます。しかし薬物投与で、ある日突然言葉を取り戻します。レナードというのがその主人公の患者です。セイアというのは主治医です。

教 レナードがこういっただのです。

仏 『皆生きることの素晴らしさを忘れている。持っている物の尊さを教えてやらなきゃ。』

人生は楽しいんだ。尊い贈り物だ。人生は自由で素晴らしい。我々は感謝の心を忘れてい
る。仕事・楽しみ・友情・家族への感謝……。』

夜中にたたき起こされた主治医は、朝の五時まで彼の話しにつき合わされました。その患者
レナードは三十年間の症状から戻ったのですが、結局は薬の力でしたから、一時的な回復でし
た。そのあと再度発病したのです。医学的にはある面では失敗したけれども、主治医セイアは
その事実と意義を理事会で発表しています。セイアは懸命に語りました。

『確かに我々は間違っている。つまり、人の魂は、どんな薬よりも強いものです。それを
忘れてはなりません。仕事・楽しみ・友情・家族……。何よりも大切なもの、それを忘れ
ている……。』

あとは言葉になりませんでした。これは本当にいのちのある言葉であり、光っている命を伝えよ
うとする言葉です。仏教では、そのような生命いのちある可能性を仏性と申すのでしょうか。仏性があ
るといふ、その例だと思います。

最後に「つまづいたおかげで」という詩を御紹介して私のお話を終らせていただきたいと思
います。この詩を読むとき私は、何か深いものの存在に気づかされるのです。朗読させて頂き

仏 教 音 楽

ましよう。

つまづいたりころんだりしたおかげで

物事を深く考えるようになりました

あやまちや失敗をくり返したおかげで

少しずつだが人のやることを

暖かい目で見られるようになりました

何回も追いつめられたおかげで

人間としての自分の弱さとだらしなさを

いやというほど知りました

騙されたり裏切られたりしたおかげで

馬鹿正直で親切な人間の暖かさも知りました

そして……身近な人の死に逢うたびに

人のいのちのはかなさと

いまここに生きていることの尊さを

骨身にしみて味わいました

人のいのちの尊さを 骨身にしみて味わったおかげで

人のいのちをほんとうに大切にする ほんものの人間に

裸で逢うことができました

一人のほんものの人間にめぐり逢えたおかげで

それが縁となり 次々に沢山のよい人たちにめぐり逢うことができました

だからわたしのまわりにいる人たちは みんなよい人ばかりなんです。

（相田みつを）

厳しい社会環境の中ですが、皆さんがそれぞれ御自分に心の畑、心の田圃を耕してください、充実した人生を送られますことを念じながら、私の拙い話をこの辺で終えさせていただきますと思います。長時間ご清聴ありがとうございます。

——一九九四・五・二七——